

米軍B29の示威的飛行 日本軍の高射砲は届かない

空襲といってもB29が飛来しただけで、日本軍の対空砲火の凄まじい音が恐怖心を煽ったのであった。当時上海には、精銳の海軍特別陸戦隊本部をはじめ、日本軍人十万人、民間人十万人が居た。B29は爆弾を落とすのでもなく、一万メートルの上空からの示威的飛行であった。日本軍の高射砲は届かない。高射砲の破片で何十名かの市民が怪我をした。

「日本軍の敗戦も間もない」と

たまたま撃墜されたB29の残骸を南京路の上海競馬場に誇らしげに展示していた。それに対し中国人は、日本軍の敗戦は間もないと嘲笑していた。



▲陸軍兵士の軍装

(東京書籍『新総合図説国語』より)

③ “日本人街の賑わいと 対米戦への備え”

上海には、日本人の映画館や劇場が数館あった。観に行くに必ず、椅子の下を見るよう放送があった。反日家による時限爆弾が仕掛けられていないかを、確認するためであった。

日曜日には、いわゆる日本人街の呉淞路は、日本人と軍人、中国人で溢れる賑わいだった。日本兵はすれ違う上官に対しては立ち止まって挙手敬礼の習わしがあり、兵卒は数歩歩いては敬礼するのだから子供心に気の毒に思えた。

日本兵もまた戦争の被害者

一九四五年になると、我が家の広い庭に、日本兵が塹壕造りに毎日汗を流していた。休憩

時に彼等と話すと、故郷の家族のことに話がはずんだ。日本兵もまた、無謀な戦争の被害者でもあった。

④ “対中国蔑視教育の 恐ろしさ”

一九四五(昭和二十)年の終戦で、多くの日本人とともに、私も無事引き揚げる事ができた。やがて一九四七年、内山完造氏との縁で日中間航空の第一便で訪中し、以来一九九〇年代からは

度々、幼児期の故郷上海を散策し、旧懐の念を満たしてきた。

私の心の中にも蔑視感が

ある訪中での晩のこと、有名な上海オールドジャズからホテルへの帰途、タクシードライバーの助手席に乗り南京路の綺麗なネオン街をビデオに撮っていた。すると、運転手が怒った口調で車を歩道に寄せ、降りてくれと言わんばかりであった。助手席は原則女性が座る座席だったのです。私はその無礼を謝ると親切に送ってくれた。

私はそれにしても、初めて中国人に頭をさげて謝るなんて、何かプライドが悔しかった。私の心身にも中国蔑視感があったのだ。昔の習慣や教育の大切さや恐ろしさを感じた。

日中の平等互惠、友好教育を

昨今、メディア等で中国の恐ろしさが伝えられているが、江南地方の古鎮に行くと、百年一日の如くのみびりした日常生活や人情に触れられる。素晴らしい水郷の風景や文物、人なつこい住民に接すると、平和のありがたさを感じてみ感じる。中国も義務教育での反日教育などせず、平等互惠、友好の教育に熱を入れて貰いたい。それが今後のおぼつかまりない日中両国友好になると思ふ心境です。

(「はらまち九条の会」会員)

他の「九条の会」情報をインターネットでもご覧ください!

- インターネット、「九条の会」や「はらまち九条の会」で検索すると、相双地区をはじめ福島県内や全国の「九条の会」の情報やニュースも簡単に見ることができます。
- 『相馬市九条の会』ニュースも、毎月タブロイド版8ページで発行。内容も大変充実して読みごたえもあり、私たちもお手本にさせていただいています。ぜひ、ご覧ください。
- この『九条はらまち』も勿論、会発足の創刊号からすべての号が全国や世界に発信されていることになり、毎号誤りのないよう大変緊張して編集しています。

